

Management Club Report

Mar.2013/Vol.123

Monthly Opinion 《悪平等発想を断つ》

今、大きな政治経済の話題になっていることのひとつに、環太平洋パートナーシップ協定（TPP）へのわが国の参加問題があります。主に農業関係者と医療関係者からの警戒感が強いようですが、この両業界が抱く警戒感には大きな違いがあります。

農業界が抱く警戒感は、海外からの安い農産物が大量に入り込むと、国内産の農産物が売れなくなり国内農家がつぶれるという心配であるのに対して、医療界のそれは、逆に高度で高額な治療技術や治療薬が入ってくることと混合診療解禁によって現行の医療制度が崩壊し、経済的に豊かでない人は医療が受けられなくなるという心配です。

農業界の主張は、少し情けない気はしますが、それでも分かりやすい理屈です。一方医療界の主張には分かりづらいものがあります。農業界と同じ需給原則に則れば、安いものではなく高いものが入ってくるわけですから、心配することはないのに、困るのは自分たち医療者ではなく貧乏な国民であると言って心配している点です。何か弱きを助ける正義の味方のように聞こえてきますが、より高度な治療技術や医薬品が入ることで医療レベル全体が底上げされることはむしろ歓迎すべきことではないでしょうか。

問題はそのメリットがどのようにして広く行き渡るようにするのか、それは次の別の検討課題とすべきではないかと思います。変に先読みをして、現在の体制が壊れることばかりを徒に不安視しているだけでは、成長も前進も見ることにはできないでしょう。

今月の Monthly Opinion は、現代社会にはびこる過大な権利意識や悪平等としか思えない平等思想について“多くの批判があることは承知のうえで述べてみたいと思います。

1

正しい歯科医療を受ける権利は誰にでもあるのか

ジャパンデンタル歯科医院経営研究会のセミナーで得たもの

3月の初め頃に、以前の勤務先であるジャパンデンタルが主宰する『歯科医院経営研究会』の講演会があり聴きに行きました。前半はデンタルヘルスアソシエイト代表の岩田健男先生、後半は税理士法人ネクサス代表社員の角田祥子先生のお話でしたが、岩田先生は「臨床家としてどうすれば、よりよい歯科医院」